

エルサレムへの帰還

(本稿は 2015 年の LCJE エルサレム会議で提出された論文の翻訳です。翻訳:佐野剛史)

CFJ ミニストリーズ 国際ディレクター

エフライム・ゴールドシュタイン (Efraim Goldstein) 博士 yshuahai@gmail.com



ユダヤ人のイスラエルの地への帰還は、聖書の歴史とユダヤ民族のターニングポイントとなった。二千年にもわたる離散の後に起きたユダヤ人国家の再興は、20 世紀と 21 世紀の歴史を揺るがした大事件である。エルサレムが世界中で知られているのは、そこに住んでいる人々だけではなく、その町が象徴しているものを人々が知っているためである。

19 世紀後半に始まるユダヤ人のシオン¹への帰還は、歴史の空白の中で突如起こったことではなく、いくつもの歴史的な出来事が重なった結果だった。その一つに、中東とヨーロッパの政治的なバランスに変化が生じたことがある。また、当時、ヨーロッパのクリスチャンの間で霊的覚醒運動が起こり、リバイバルが起きていたことも一つの要因で

ある。さらに、若い世代のユダヤ人の中で恐れと不安が広がり、将来的にユダヤ人が安心して暮らせる場所はエレッツ・イスラエル (イスラエルの地) しかないという意識が高まっていたこともあった。そして、20 世紀には、第一次・第二次世界大戦、ホロコースト、ソビエト連邦の興亡といった天地を揺るがすような出来事があった。

シオンへの帰還を予告した聖書箇所

メシアニック・ジューの解釈では、エゼキエル 36 章と 37 章²は段階的に成就する。まず、ユダヤ民族の物理的な復興が成り、イスラエルの地に帰還する。そして、次の段階で干からびた骨に「霊 (ルアフ)」が吹き込まれる (エゼキエル 37:14)。

ユダヤ民族の復興は、古くから 2 段階で起こると考えられてきた。ユダヤ人の物理的な帰還、そして霊的な回復という 2 段階である。この 2 つは別々の出来事だが、関連している。そのようにユダヤ人は段階的にシオンに帰還すると理解していたラビに、ツヴィ・ヒルシュ・カリシャーがいる。

1 訳注: 「シオン」はエルサレム市街の丘の名前。エルサレムや約束の地を象徴する言葉として使われている。

2 訳注: イスラエルの山々への預言と、干からびた骨の谷への預言

ツヴィ・ヒルシュ・カリシャーは 1793 年にポーランドのポーゼンに生まれたラビで、黎明期のシオニズム運動を支持した数少ない正統派のラビだった。カリシャーは 1892 年刊の著書『Seeking Zion (シオンを探し求めて)』で、ユダヤ人のシオンへの帰還は段階的に起こると記している。

われわれはイスラエルの贖いを願い求めているが、それは突如、奇跡的に成るものではない。ほむべき御名、全能なる方が、いと高き所から突如降りて来て、その民に「さあ行け」と命じる、そのようなことは起きない。神がメシアを一瞬のうちに天から地上に送ることもない。……神のしもべ、預言者たちによって約束されていた、喜びの時と奇跡はすべて成就する。しかし、あわてふためく必要はない。イスラエルの贖いはゆっくりと近づいて、解放の光は徐々に輝き出すからである。³

ユダヤ民族のイスラエルの地への帰還は、19 世紀の主流派ラビが予期していたようなやり方では起こらなかった。帰還は、イスラエルの聖なる方が、静かに、注意深く見守る中で、世俗派ユダヤ人の手によって押し進められることになった。

歴史の潮流の変化とシオニズム運動の興隆

フランス革命とそれに続くナポレオンの聖地遠征（1798 年）は、ユダヤ人にとっても、福音的クリスチャンにとっても大事件だった。シオニズム運動が誕生するまでの一連の出来事を記した著書で、アリー・モーゲンスターンはフランス革命とナポレオンの聖地遠征が与えた影響の大きさを以下のように記している。

ナポレオンの聖地遠征とその影響を見ると、イスラエルが贖われる際にクリスチャンが果たすとミドラッシュ（口伝律法）が告げていた内容と驚くほど一致していた。また、プロテスタント国家のイギリスでも、ナポレオンの聖地遠征が刺激となってイスラエルの聖地帰還をめぐる神学的議論がさかんになっていた。⁴

パレスチナで次々に起こる出来事を見て、聖書的視点で物事を見る人々は変化の兆しを感じ取り、事態の推移を注視するようになっていた。彼らにとって、こうした出来事は終わりの時代の到来を告げ知らせるしるしだった。

聖書学者のルイス・ゴールドバーグ博士は、ユダヤ人のイスラエルの地への帰還はオスマン・トルコ帝国内で起こっていた歴史的变化が複雑に絡み合って実現したものだとしている。

神の働きというと、メシアが来る、イスラエルが 1 日で民族的回心をするといった大きな出来事の単位でしか考えられない信者が多い。……しかし神の摂理は、人類の歴史を通して静かに進行する。その一例が、メシアがだれかも知らない、メシアの存在も信じない不信仰な人々によって

3 Rabbi Zvi Hirsch Kalischer, “Seeking Zion” in *The Zionist Idea*, ed. Arthur Hertzberg, 111–114. (New York: Atheneum Press, 1984), 111.

4 Arie Morgenstern, *Hastening Redemption: Messianism and the Resettlement of the Land of Israel*, translated by Joel A. Linsider (USA: Oxford University Press, 2006), 10–11.

建国された現代イスラエルである。

オスマン・トルコ帝国に変化の波が押し寄せ、中東に新しい時代がやって来ようとしていた。16世紀以降、オスマン・トルコ帝国は一枚岩で不動の支配を確立していた。ところが、19世紀初頭になると支配力を徐々に失い始め、ヨーロッパ諸国が地中海地方の支配権をめぐる競争が激しくなっていた。⁵

状況の変化に伴って、オスマン・トルコ帝国はパレスチナに対する支配をゆるめ始めた。1800年代には貿易や宗教的巡礼の門戸をロシア、ドイツ、イギリス、アメリカに開いた。初期のシオニストが登場する19世紀後半にもなると、パレスチナの土地を高額で払い下げるようにもなった。

シオニスト運動が興ると、ユダヤ人知識階級と福音派クリスチャンの間に奇妙な協力関係が生まれた。初期のシオニズム指導者とクリスチャン・シオニスト（当時はまだそういう呼称はなかったが）の間には、連絡窓口も設けられた。

この一風変わった同盟関係の実例を、ウィリアム・E・ブラックストーン（1841～1935）の生涯に見ることができる。ブラックストーンはシカゴの実業家で、バイオラ大学の初代学部長を務め、シカゴ・ヘブル・ミッション（現ライフ・イン・メサイア・インターナショナル）を創立するなど、さまざまな業績を残した人物である。彼はユダヤ人のために当時のベンジャミン・ハリソン米大統領に嘆願し、ユダヤ人がイスラエルに帰還できるように働きかけた。「ブラックストーンの覚書は、テオドール・ヘルツルによるユダヤ国家設立運動よりも古く、史上初の試みであった」⁶

欧米の基督教の変化

ユダヤ人のイスラエル帰還運動が始まる前に、北ヨーロッパではリバイバルが起こっていた。19世紀のプロテスタント諸派の中では宣教に対する関心が高まっており、その中には中東に対する宣教も含まれていた。特にイギリスとドイツのプロテスタントは、中東の宣教を重視し始めていた。宣教拠点がパレスチナ、エジプト、シリア、レバノンに築かれ、そうした国では宣教師の姿を見ることは日常の風景となっていた。こうした宣教運動のうねりやパレスチナ宣教に対する意識の高まりについて、カイ・ハンセンやケビン・クロムビー、ツビ・サダン、ゲルシオン・ニレルといった人々はその様子を詳細に記録している。こうした研究結果や記録は、季刊誌『ミシュカン』への寄稿や、書籍、過去のLCJE会議に提出された論文として発表されている。また、各種宣教団体や教団も、この時代の活動について事細かに記録している。

この時代に活躍した宣教師たち、ジョン・ニコライソン、ジョセフ・ウルフ、マイケル・アレキサンダー司教（イスラエルで初めて祭司に任命されたユダヤ人）、メルキオール・チョウディ、アブラハム・オクゼレット、サムエル・ゴバット、ベン・ツィオン・フリーランダーなどの働きについても、詳しい資料が残っている。この時代（1825～1910）の宣教師が経験した苦難は筆舌に尽くし難く、それに

5 Louis Goldberg, *Historical and Political Factors in The Twentieth Century Affecting The Identity Of Israel in Israel The Land and the People*, ed. H. Wayne House, 113–141. (Grand Rapids, MI: Kregel Pub. 1998), 116.

6 Jonathan Moorehead, “The Father of Zionism: William E. Blackstone?” *Journal of Evangelical Theological Society* 53/4 (December 2010 787–800), 787

よって病に倒れ、若くして亡くなる者も多かった。こうした苦難の中にあっても、宣教師たちはパレスチナと中東地域において生きたキリストの証しを立てることに成功した。1880年代にイスラエルに移住したユダヤ人移民たちは、こうした宣教師に迎え入れられ、生活に必要な支援を受け取っていた。

1882年にロシアで起こったポグロム（ユダヤ人虐殺）を逃れてイスラエルにたどり着いたユダヤ人難民も、こうした宣教師たちに暖かく迎え入れられ、支援物資を受け取った。ヤロン・ペリーとエリザベス・ヨディムは、19世紀にイギリス人がイスラエルで行ったユダヤ人伝道の歴史を著書『British Mission to the Jews in nineteenth-century Palestine（19世紀のパレスチナにおける英国人のユダヤ人宣教）』の中で記し、宣教団体が果たした役割について次のように記している。

宣教師たちは、ユダヤ人が抱える物質的、霊的な必要に対してすぐに行動を起こした。移民してきたユダヤ人の方も出身国で宣教師の働きをよく知っており、歓迎ムードの中で受け入れられた。

7

ユダヤ人宣教団体は、第一次・第二次帰還運動（アリヤー）の前にすでにイスラエルの地に根を下ろし、活発に働いていた。ジョン・ニコレイソンがクライスト・チャーチ（中東最古の教会で1849年に完成）の建設を始め、アレキサンダー司教（1799～1845）が聖職者按手を受けた頃は、100年以内にイスラエルで大きな変化が起きるとは思われていなかった時代である。その後、1948年までにユダヤ人の人口は60万人に膨れ上がることになる。クライスト・チャーチが建てられた時代から現代イスラエルが建国されるまでに、メシアニック会衆、教育、医療、宣教団体のためのインフラが宣教団体やキリスト教諸教派の手によって築かれていった。

ユダヤ人社会から非難されてきた「宣教団体」だが、この決定的に重要な時期に、宣教団体は絶妙のタイミングでイスラエルで活動を始め、ユダヤ人難民の必要を満たした。当時のイシューブ（イスラエル建国前のパレスチナにおけるユダヤ人共同体）では、移民の必要を満たすことはできなかった。また、世界のユダヤ人共同体全体としても、パレスチナのユダヤ人を支援する体制はまだ整っていなかった。

イスラエル帰還と「イエシュ」⁸ に対するユダヤ人の見方

1800年代に誕生したシオニズム運動は、一般に世俗派ユダヤ人の運動だと見られている。正統派ユダヤ人の圧倒的大多数は、ユダヤ人をシオンに導いて行くのはメシアだと考えていたからである。

しかし例外的に、影響力を持つラビの中にもシオニスト運動を好意的にとらえ、そこに神の御手が働いていると考えた人々がいた。その中でもよく知られているのが、ツビ・ヒルシュ・カリシャーとアブラハム・クックというラビである。

運動の初期から1948年のイスラエル建国まで、シオニズム運動を牽引してきたのは世俗的ユダヤ人

7 Yaron Perry, and Elizabeth Yodim, *British Mission to the Jews in Nineteenth-century Palestine*, (London:Frank Cass Pub., 2003), 136.

8 ここで「イエシュ (Yeshu)」という名を使っているのは、当時の人々がイエシュアのことをヘブル語で呼ぶ時は「イエシュ」と読んでいたのと一貫性を保つためである。英語で書く時は「イエス (Jesus)」としていた。当時の人々の大半は、「イエシュ」を見下すような意味合いで使っていたわけではなかった。

だった。この運動を引っ張ってきたのは教養のあるユダヤ人の学者や作家たちで、シオンに帰還したいという思いをユダヤ人の心に燃え立たせることができる愛国者たちだった。そういった指導者には、テオドア・ヘルツル、マックス・ノルダウ、アハッド・ハアム、モーゼス・メンデルスゾーン、レオン・ピンスカー、モーゼス・ヘス、ウラジミール・ジャボチンスキー、デイビッド・ベングリオンといった人々がいた。

シオニストの指導者は世俗派の人々や正統派ではない人々が多かったが、シオンを恋い慕う人々の霊的な願いに鈍感だったわけではない。指導者の多くは、イスラエルに帰還しようという訴えに霊的な要素や表現を組み込もうとした。

そうした表現の中に、イエス（イエシュ）を正真正銘のユダヤ人としてとらえ直そうという試みがあった。イエスは、あわれみの心と信仰にあふれ、イスラエルの幸せを願う人物として描かれた。そのような作家や芸術家にとって、イエスは新しい時代のユダヤ人を代表する人物だった。

ヨーロッパで起きたユダヤ人解放⁹以降、ユダヤ人のイエシュアに対するとらえ方は変化してきた。ツビ・サダンによると、イエスを再評価しようとする動きは、ユダヤ人解放の長いプロセスの中で起こってきたものだという¹⁰。その博士論文の中でサダンは、初期のシオニストたちがイエシュアをどのように文章で表現しようとしたかを詳細に分析している。

「イエシュ」についてオープンに語り合おうという初期シオニストの態度は、古くから続くユダヤの伝統と決別する大胆な動きだった。初期の近代ヘブル語文学では、ヨセフ・クラウスナー、アハロン・アブラハム・カバックといった人々が、それまでと違ってイエシュをあわれみ深い方として描いた。イスラエル国歌の「ハティクバ」を作曲したナフタリ・インベルもイエシュについての文章を残しており、1880年代にイスラエルでクリスチャンと良い出会いがあったことにも触れている。

イスラエルに移住してきたばかりのインベルは、初期のクリスチャン・シオニストであるオリファント夫妻と懇意になった。オリファント一家はオシフィヤという町に住んでいて、1882年から1888年までインベルはそこで行政補佐官をしていた¹¹。インベルは自分のことをクリスチャンとは決して言わなかったが、オリファント夫妻の信仰から多大な影響を受けていた。生涯にわたってインベルの友であったイスラエル・ザングウィルによると、インベルは晩年にキリスト教に回心したという。¹²

イスラエル人がイエシュアをどう見ていたかがわかる貴重な資料に、ネタ・スタール著『Other and Brother（他者と兄弟）』がある。スタールは、20世紀に活躍した作家、芸術家がイエシュアをテーマに手がけた作品を調べ上げ、著書にまとめている（この本は英語とヘブル語で出版されている）。

著書の中でスタールは、近代ヘブル文学の中でイエシュに対するとらえ方がどのように変化していったのかを注意深く追っている。シオニストの思想家や作家たちがイエシュから受けたインスピレーションをスタールは次のように記している。

一方、シオニストの思想家や作家にとって、イエスという人物はさらに複雑な組み合わせを象徴していた。イエスは、ユダヤ人を東方に戻して移住させようという試みと、西洋の文化的影響

9 訳注：ユダヤ人に対する政治的、社会的差別を撤廃しようという運動。

10 Tzvi Sadan, “Jesus of Nazareth in Zionist Thought 1881–1945.” *Mishkan* Issue 49 (2006):59–64.

11 *Encyclopedia Judaica*, Vol 8 He-Ir, (Jerusalem, Israel: Keter Pub., 1972). 1290

12 *Encyclopedia Judaica*, 1290

を保とうというシオニストの思いを象徴していた。1882年から1948年にかけてパレスチナの地で生まれたヘブル文学では、イスラエルの地の土着文化に根ざしつつも、西洋の価値観や理想に基づいた新しい文学を作り出そうと意識的な努力が払われていた。¹³

アヴィグドール・シャナン編纂によるヘブル語の著書『Jesus Through Jewish Eyes (ユダヤ人の目から見たイエス)』は、中世から近代にかけて登場した著名なユダヤ人思想家のイエスに対する見方を紹介している。¹⁴ その中で、近代のイスラエル人作家が持っていた独特なイエス観が紹介されている。

その中でも特に目を引くのが、アハロン・アブラハム・カバックの書いた『The Narrow Path (狭き道)』で描かれているイエス観である¹⁵。この本の中には、園で思索にふけり、自分自身を贖いだそうとするイエシュが登場する。

イエシュは言った。「だれでも、善人になりたい、だれよりも善人になりたいと思うものだ……
聖なる方は被造物に、この善を慕う思いを与えられた。ただ、近頃は善が見当たらないのだよ」

イスラエルの建国やホロコースト以前のイスラエル文学や芸術では、イエシュは人間的で同情心にあふれる方として描かれている。そこには明らかに、イエシュアを自分たちユダヤ人の一人として描こうとしていた姿勢が見て取れる。しかし、ホロコースト以後のユダヤ、イスラエル文学および芸術では、どのような意味合いであれ、イエシュアを取り上げた作品がほとんどなくなってしまった。

ここで認識すべき点は、芸術や文学で表現されたユダヤ人のイエシュアに対する見方を見れば、今よりもずっと良い時代があったということである。ホロコースト以前の時代では、世俗派のイスラエル人指導者はイエシュアについて今よりも健全で、オープンな考え方をしていた。今日では、イエシュアに対する態度はよそよそしく、イエシュアをイスラエル社会でどう位置づけるかということについて無関心である。

考察

ユダヤ民族のイスラエルの地への帰還は、神の御手によって注意深く導かれた数々の歴史的イベントと、聖書の約束と預言の成就によって実現した。1800年代の中頃から1948年のイスラエル建国まで続く激動の時代を観察すると、次のようなことがわかる。

第一に、1860年から1948年にかけて起きたさまざまな歴史的イベントを目の当たりにしたユダヤ人移民と福音派クリスチャンは、そうした出来事を世界の終わりの前兆だととらえた。二つの世界大戦、ホロコースト、そして現代イスラエルの奇跡的な建国を経験すれば、終わりの時代が来たと思っても不思議ではない。確かに激動の時代だった。しかし、イエシュアの再臨は今すぐにも起こると思っていた人々の期待は外れた。

13 Neta Stahl, *Other and Brother Jesus in the 20th-Century Jewish Literary Landscape*, (New York: Oxford Press, 2013), 7.

14 ותוא שיאה -ךרוע רודגיבא נאנש , מידויה מירפסמ לע ושי 14

Avigdor Shanan, ed. *Jesus Through Jewish Eyes* (Israel: Yediot Achronot, 1999).

15 קבאק אברהם , קבאק נרהא 15 272 (Aharon Avraham Kabak, “The Narrow Path”) this author’s translation of the portion.

現在も、世界中で起こっている出来事を見て「終わりの時代」が来たと叫ぶ人が多くなってきている。しかし、慎重に、よく観察して、われわれが生きている時代を見分ける必要がある。

第二に、ユダヤ人のエルサレム帰還は歴史的空白の中で起こったことではない。離散していたユダヤ人の帰還は、パレスチナでアラブ人が増加するのと時を同じくして起きた。この二つの共同体は、同じ土地、同じ条件の下で並行して拡大していったのである。

不幸なことは、できたばかりのアラブ人信者の共同体とユダヤ人信者の共同体の間にほとんど交流がなかったことである。それぞれの共同体に影響力を持っていた宣教団体や教団は、この2つの共同体と一緒にしようとはしなかった。重点はそれぞれの共同体を成長させることに置かれた。それは、同質の人々が集まる教会が成長するというほぼ確立された宣教理論に基づいていた。アラブ人はアラブ人教会で成長し、ユダヤ人はユダヤ人の共同体で成長すればいいという考え方である。ただ、ユダヤ人とアラブ人社会の間にあった猜疑心や緊張関係を考えれば、この分離によって誕生したばかりのメシアニック・ジュー共同体に安定性がもたらされたとも言える。

その後の世代のアラブ人、ユダヤ人福音派も、互いの共同体の間に架け橋を築こうとしなかった。いつの時代も注目すべき例外はあるのだが、後々まで影響を残すところまではいかなかった。

しかし近年では、アラブ人信者とユダヤ人信者の間で交わりや一致が生まれてきている。これは目を見張る事実であり、奇跡的でもある。われわれの世代には、アラブ人とユダヤ人の一致によってメシアであるイエシュアを証するという機会が与えられている。われわれの霊的な祖先もこの働きを誇りに思ってくれるだろう。

第三に、イスラエル建国前のユダヤ人とアラブ人の教会は宣教団体や教団によって建てられたものであることを覚えておく必要がある。その当時はイスラエル人によって建てられた本格的なメシアニック会衆はなかった。当時の会衆の施設は外国の資金によって建設され、そうした施設や資産の多くは今も外国の団体の所有になっている。

われわれが敬愛するメシアニック・ジューの先駆者たちの中には、外国資金に頼らないという原則をよく心得ていた人々がいる。そうした人々は「建物を建てれば人は来る」という原則に従わなかった。そうした人々は、ビジョンや希望がなかったので大規模な施設や大きなプロジェクトに投資しなかったのではない。むしろ、自分たちでまかなえる範囲でやっていくという実際的な知恵を持っていたのである。1920年から1960年にかけては経済状況が厳しかったので、当時の人は節約とはどういうものかをよく知っていた。そこには初期のイスラエル国家に満ちていた独立独歩の気概があった。われわれも、自分たちがまかなえる範囲で、外国の資金に頼らずにイスラエル人信者の共同体を築いていくことを学ぶ必要がある。

イスラエルの開拓者や、初期の頃に帰還してイエシュアを宣べ伝えた忠実な信者たちは、信じられないような苦難や、世界を揺るがす大事件を経験した。しかしそうした障害を乗り越えて、信者たちはイエシュアの福音を携えて前進を続けたのである。

われわれも今苦難に直面している。手から鋤を離さず、もたらされる収穫、約束の地に住むアブラハムの子孫という収穫に目をとめなくてはならない。

私の今の世代に対する望みと祈りは、パウロの次の言葉に要約されている。

「善を行うのに飽いてはいけません。失望せずにいれば、時期が来て、刈り取ることになります」（ガラテヤ6：9）